

2021 年度 大阪市立大学個別学力検査（後期日程）
文学部論文「解答例」

第 1 問

植物が遠い距離を移動し、新しい土地に定着することは珍しいことではない。オランダから日本に来たシロツメクサのように、種子が何かの荷に紛れ込み、新しい土地に移動することはいつでもどこでも起きている。人力に限らず、多くの植物は風により、あるいは自由に移動する動物に依存し、植物の器官の弾き飛ばす力をもって、できる限り種子を遠くを送る仕組みを有している。植物は大地に束縛された不自由な生ではない。(194 字)

第 2 問

植民地植物園はロンドンの商人エリスや植民地で開業した医師ガーデンを中心に、「総督と植民地議会の管理する公立植物園」として構想された。それは、外国から入手している有用な植物を植民地に集め、その地の気候に合うものを実験的に栽培するというもので、植民地にも本国イギリスにもいずれ利益をもたらさうものとして想定されていた。しかし、植民地のプランテーション経営者たちは、米やインディゴなど、確実に利益を回収できる作物に執着し、実験的な栽培に協力することはなく、また植民地議会もインディゴの成功に満足して、植物園が新たな利益を生み出さうという将来的な可能性には関心を示さなかった。(286 字)

第 3 問

植物と新型コロナウイルス（以下、コロナ）を比較すると、まず形質面や移動形態について言えば、宿主を必要とするか否か、目に見えるか否か、気候・土壌等の制約を受けるか否かといった相違がある一方、両者とも「移動する意志をもつかのよう」にグローバルに広がってきた点は共通する。次に、移動の結果としての社会的影響について考える。植物の移動はプランテーション開発を可能にしたが、それは土地収奪や強制的な労働移動を伴うもので、新旧世界の力関係をもとにした格差を拡大させた。植物の移動は「交換」であったとはいえ、それは対等な関係ではなく旧世界の権力を強化するものとして利用された。コロナもテレワークが可能な層と非正規や現場の労働者の格差を拡大させるという懸念がある。ただ、コロナは、中国に始まりイタリアやアメリカ等で拡大するなど、大国・先進国での影響も大きい一方、台湾やタイのように小国・途上国での抑え込みに成功した例もある。また、テレワークの普及や3密回避により都市－農村間の格差が緩和される可能性も期待されている。ツールとして利用できる植物と、人間の意志が反映されにくいコロナでは、その結果に大きな差が生じうる。(499 字)